

半七捕物帳

雷獣と蛇

岡本綺堂

青空文庫

八月はじめの朝、わたしが赤坂へたずねてゆくと、半七老人は縁側に薄縁うすべりをしいて、新聞を読んでいた。

狭い庭にはゆうべの雨のあとが乾かないで、白と薄むらさきと柿色とをまぜ栽うえにした朝顔ふた鉢と、まだ葉の伸びない雁来はげいと紅うの一と鉢とが、つい鼻さきに生き生きと美しく湿ぬれていた。

「ゆうべは強い雷でしたね。あなたは雷がお嫌いだというからお察し申していましたよ。小さくなっていましたか」と半七老人は笑っていた。「しかし昔にくらべると、近来は雷が鳴らなくな

りましたね。だんだんと東京近所も開けてくるせいでしょう。昔はよく雷の鳴ったもんですよ。どうかすると、毎日のように夕だちが降って、そのたんびにきつとごろごろぴかりと来るんですから、雷の嫌いな人間はまったく往おうじよう生せいでした。それに、この頃は昔のような夕立が滅多めったに降りません。このごろの夕立は、空の色がだんだんにおかしくなつて、もう降るだろうと用心しているところへ降ってくるのが多いので、いよいよ大粒がばらばら落ちてくるまでには小こいつとき一時ぐらいの猶予はあります。昔の夕立はそうでないのが多い。今まで焼けつくように日がかんかん照つているかと思うと、忽ちに何処からか黒い雲が湧き出して来て、あれという間も無しにざつと降ってくる。しかもそれが瓶かめをぶちまけ

るように降り出して、すぐに、ごろごろぴかりと来るんだからたまりません。往来をあるいているものは不意をくらって、そこらの軒下へ駆け込む。芝居や小説でも御承知でしょう。この雨やどりという奴が又いろいろの事件の発端ほったんになるんですね。はははははは。しかし又、その夕立のきびきびしていることは、今云うように土砂ぶりに降ってくるかと思うと、すぐにそれが通り過ぎて、元のように日が出る、涼しい風が吹いてくる、蟬が鳴き出すというようなわけでしたが、どうも此の頃の夕立は降るまえが忌いやに蒸むして、あがり際ぎわがはつきりしないから、降っても一向に涼しくなりません。やっぱり雷が鳴らないせいかも知れませんね」

老人は雷の少ないのを物足らなく感じているらしく、この頃の

ようではどうも夏らしくない、時々はゆうべのように威勢よく鳴つて貰いたいなどと云つて、わたしのような弱虫をおびやかした。それから引いて、老人は雷獣の噂をはじめた。

「日光なんぞの山のなかに棲んでいるのは当りまえでしょうが、江戸時代には町なかへも雷獣があらわれて、それをつかまえたという話はたびたびありました。明治になってからも、下谷に雷が落ちたときに、雷獣を見つけて捉まえたということを知りました。これもその雷獣のお話ですよ」

慶応元年六月十五日の夜は、江戸におおあらし大風雨があつて、深川あたりはたかしお高潮におそわれた。近在にもでみず出水がみなぎつてできし溺死人が

たくさん出来た。そのおそろしい噂がまだ消えないうちに、同じ月の二十三日の夜には又もや大雨が降り出した。今度は幸いに風を伴わなかったが、その代りにすさまじい雷が鳴りひびいて、江戸市中の幾カ所に落ちかかった。

そのなかで、浅草三好町みよしちようの雷が尾張屋という米屋の蔵前に落ちて、お朝という今年十九の娘を殺した。重吉という若い男は一旦気絶したが、これは医師の手当てをうけて蘇生した。変死のうちでも、雷死は検視をしないことになっているので、お朝の死骸はあくる日のゆう方、今戸いまどの菩提寺ぼだいじへ送られて式かたのごとく葬られた。

落雷で震死するのはさのみ珍らしいことでもないのは、それに

対して検視の役人が出張しないのをみても判る。この事件も単に不幸なる娘の死にとどまって、何事もなく済んだのであるが、尾張屋の落雷に就いてこんな噂が伝えられた。

「あの雷の落ちたときには、大きい雷獣が駈けまわっていたそう
だ」

落雷の時には雷獣と一緒に落ちて来て、襖障子や柱などを掻き破ってゆくということは、その時代の人々に信じられていた。その雷獣を見たのはおかんという下女であった。かれは宇都宮在の生まれで、子供のときから日光附近の大雷に馴れているので、ほかの人々ほどには雷を恐れなかつたらしい。勿論、落雷の刹那には、両手で自分の耳をおさえて、女中部屋にうつ伏していたので

あるが、蔵のまえが俄かに昼のようにあかるくなって、そこに落雷したことを知った時に、かれは誰よりも先にその場所へかけ付けると、まず彼女の眼にはいったのは、一匹の怪しい獣けものがそこらを駆けまわっていたことであつた。獣は稲妻のように忽ちその影を消してしまつて、あとに残されたのは若い男と女とが正体もなく倒れている姿であつた。おかんは声をあげて、家うちじゆうの人を呼びあつめた。

おかんのほかに誰もその正体を見とどけた者はなかつたが、尾張屋の人々もその雷獣の話を信じた。近所の人々も怪しまなかつた。雷獣の噂はそれからそれへと伝えられたが、町役人ちやうたちもそれを疑わなかつた。雷獣のゆくえは勿論わからなかつた。

お朝の二七日にしちにちは七月七日であつたが、その日はあたかも七たなば夕たの夜にあたるというので、六日の逮たいや夜に尾張屋の主人喜左衛門は親類共と寺まいりに行つた。重吉も一緒に行つた。かれはお朝と運命をとも俱にすべくして無事に助かつた幸運の男であつた。参詣がすんで、七ツ（午後四時）過ぎに寺を出る頃から、空の色が俄かにあやしく黒ずんで来たので、この町内へはいる頃から大粒の雨がばらばらと落ちて来た。あわてて店へ逃げ込む途端に、大きい稲妻が一つ光つた。つづいて雷が鳴り出した。

「早く雨戸をしめろ」

喜左衛門は指図して、家じゅうの雨戸を嚴重に閉めさせた。このあいだの出来事から雷というものに対する恐怖心の一段と強く

なっている尾張屋の者どもは、総がかりで、雨戸をしめた。障子をしめた。蚊帳かやを吊った。線香をとぼした。雷に対する防備を手落ちなく整えた頃には、雷雨がだんだんに烈しくなつて来て、嚴重にしめ切った雨戸の隙き間からも強い稲妻がたびたび流れ込んで、人々のおびえている魂をいよいよおびえさせた。暮れ六ツ頃から雨は土砂ぶりになった。雷はこの近所へ二、三カ所も落ちたらしかった。人々は自分たちの部屋に閉じ籠つて、蚊帳のなかに小さくなつていずれも生きた心地もなかった。

雷雨は五ツ（午後八時）過ぎにようやく止んだ。それで人々もほつと息をついて、しめ切った雨戸などを明けはじめると、さらに又思いもよらない椿事ちんじの出しゅつ来たいしているのに驚かされた。先

度とおなじ蔵のまえに、かの重吉が死んでいるのであった。かれの顔や手先は所嫌わずに掻きむしられていた。

かれも雷獣に襲われたらしかった。今度は尾張屋に落雷しなかつたが、近所に落ちた雷獣がここへ飛び込んで来たのかも知れないという説もあつた。このあいだの事件のあつた矢先であるので、重吉の死は雷獣の仕業であると決められてしまった。

神田三河町の半七は、子分の庄太からこの報告をうけて首をかしげた。

「天災といえは仕方ねえが、そう立てつづけて一軒の家に祟るうちのもおかしいな。その重吉というのはどんな男だ」

「主人の遠縁のもので、日光辺の生まれだそうです。年は二十一で、五、六年まえから尾張屋の厄介になってやっぱり店の仕事を手伝っているんですが、どっちかというかよわと孱弱い方で、米屋のような力仕事には不向きなので、遊び半分ぶらぶらにぶらぶらしているようでした」

「尾張屋には死んだ娘と主人のほかほかに誰がいる」と、半七は又訊きいた。

庄太の説明によると、尾張屋は近所でも内福という噂を立てられているが、その家族は多くない。女房のおむつは先年世を去つて、ほんとうの家族というのは主人の喜左衛門と娘のお朝の二人だけである。ほかには彼の遠縁の重吉と、下女のおかんと、米搗つ

きが二人と小僧が一人と、あわせて一家七人暮らしであるが、喜左衛門は手堅く商売をしているので、世間の評判も悪くない。娘のお朝も先ず十人並の娘で、これまでに悪い噂もなかった。なにしろ親ひとり子ひとりの尾張屋で、その跡取り娘をうしなつた喜左衛門のかなしみはひと通りでない。ほかから養子をするか、それともかの重吉をひきあげて相続人にするか、それもまだ決まらないうちに重吉もまた死んでしまったのは、かさねがさねの不幸であつた。

「そこで、尾張屋の親類のうちに誰か婿にでもなりそうな奴があるのか」と、半七はまた訊いた。

「さあ、そこまでは知りません」と、庄太は頭をかいた。

「じゃあ、すぐにそれを調べてくれ」

「ようがす」

庄太はうけ合つて歸つた。

それから三日ほど経つて、庄太は再びたずねて来て、尾張屋の親類一門はみな子供に縁のうすい方で、どこにもよそへやるような男の子はない。ただ本所 まつくらちよう 松倉町に商売をしている三河屋に二人の娘があるので、あるいはその妹娘を尾張屋へくれることになるかも知れないと報告した。

「そこで、その三河屋というのはどんな奴だ」と、半七は訊いた。

三河屋は夫婦ともに揃っているが、これも近所では評判のいい家である^{うち}と庄太は云つた。殊にこの家は尾張屋よりも身代が大きい

いので、妹娘には婿を取って分家させる筈になっているのであるから、果たして素直すなおに尾張屋へくれるかどうか判らないのとこののであった。

「そうか」と、半七はうなずいた。「じゃあ、三河屋へ手をつけるにも及ぶめえ。すぐに尾張屋のおかんという女を引き挙げろ」

「尾張屋の女中を引きあげるのですかえ」

「むむ。あの女がどうも胡乱うろんだ。年は幾つで、どんな女だ」

「おかんは二十三で、五年まえから奉公しているんだそうですが、ちつとも江戸の水にしみねえ女で、どうみても山出しですよ」

「おかんは日光、重吉は宇都宮、おなじ国くにもの者ものだな。女は二十三、男は二十一。よし、わかった。おれも一緒に行く。すぐにその女

を番屋へ連れて来てくれ」

二

尾張屋のおかんは町内の自身番へよび出されて、半七の吟味をうけた。かれは庄太の報告の通り、見るから田舎者らしい。小太りに肥ふとった女であるが、容きりよう貌もまんざら悪くはない。殊に色白の質たちであるので、二十三という年よりも若くみえた。ふだんから無口の女であるということであつたが、殊にこの場合、かれは極めて神妙にして、いかなる問いに対しても努すくめてことば寡すくなに答えていた。

「六月二十三日の晩、尾張屋の娘が雷火にうたれた時、おまえが一番さきに見つけたのだな」

「はい」

「その時に、雷獣のかけ廻るのを確かに見たか」

「はい」

「女の癖に、どうして一番さきに駆け付けた」

「土蔵のまえが急にぱつと明るくなりまして、かみなり様がお下りになったようでしたから、なにか間違いでもないかと存じまして……」

「で、行ってみたらどうした」

「お朝さんと重吉さんが倒れていました」

「倒れているところに、なんにも落ちていなかったか」

「気がつきませんでした」

「鼠捕り粉がこぼれていなかったか」と、半七は訊いた。

「いいえ、存じません」

「おかん」と、半七は詞をすこしことばやわらげた。「おまえは重吉をどう思っている」

おかんは黙っていた。

「重吉が可愛くなかったか」と、半七はほほえんだ。「おまえは給金を幾らほど溜めている」

おかんはやはり黙っていたが、半七に催促されて、小声で答えた。

「五両ばかり溜めて居ります」

「五両じゃあ、国へ帰つても夫婦になれめえな」

彼女はまた黙つてしまつたが、その俯向うつむいている鬢びんの毛の微かにそよいでいるのが、半七の眼についた。

「おい、おかん。もうこうなつたら、何もかも正直に申し立ててお上の慈悲かみをねがえ。おまえと重吉とはおなじ国者だ。それが一つ屋根の下に毎日一緒に暮らしていれば、おたがいに気も合い、話も合つて、若い者同士がいろいろの約束をするのも無理はねえ。だが、男という奴は気の多いもので、おまえというものを袖にして、いつか尾張屋の娘とも仲よくなつて、さぞ口惜くやしかつたらう。おれも察するよ」

おかんはやはり俯向いていた。

「ところが、おれに少し判らねえ事があるから教えてくれ」と、半七は云った。「尾張屋の娘はなぜ鼠捕り粉を買ったのだ。ひとりで死ぬつもりか、心しんじゆう中かえ。おい、黙っていちやあいけねえ。それに因っておまえの罪の重い軽いも決まるのだ。はつきり云ってくれ。どの道おまえは無事に主人の家うちへ帰られる身の上じやあねえ。くだいようだが、正直に申し立てて御慈悲を願うがいぜ」

「どうしても家へは帰れないのでございませうか」と、おかんは蒼ざめた顔をあげた。

「知れたことさ。重吉という男ひとりを殺して置いて、無事に帰

される筈がねえじやねえか」

おかんは泣き伏してしまった。

雷獣事件はこれで解決した。

万事が半七の鑑定通りであった。重吉はおかんと夫婦約束をしていながら、さらに尾張屋のお朝とも親しくなつた。それを知つて、おかんは火のように怒つて、恋のかたきのお朝を殺してしまふとまで狂い立つのを、重吉はひそかに宥^{なだ}めているうちに、お朝はいつか妊娠したらしいので、重吉はいよいよ困つた。その秘密をまた知つて、おかんは嫉妬の焰^{ほむら}をいよいよ燃^もした。世間しらずのお朝は、いたずらの罰が忽ち下されたのに驚いて、自分のから

だの始末を泣いて重吉に相談した。おかんもかげへまわって男の薄情をはげしく責め立てた。

お朝には泣かれ、おかんには責められ、板挟みになってさんざん苦しんだ重吉は、途方にくれた自棄やけ半分の無分別から、お朝を説きつけて、一緒に死ぬことになった。お朝は素直に男のいうことを肯きいて、近所の薬屋から鼠捕り粉を買って来た。それは六月二十三日の朝であつた。今夜、いよいよ死ぬという約束で、影のうすい男と女とは長い日のくれるのを待っていると、宵からの雨がやがて恐ろしい大風雨おおあらしになつた。

死に急ぎをしている若い二人にとつては、この大風雨はむしろ仕合わせであるようにも思われた。女はまず約束の場所へ出てゆ

くと、男もあとから忍んで行つた。折りからの風雨で、ほかの人は気がつかなくなつたが、男のうしろにはおかんが影のように付きまといつていた。かれは絶えず男の行動を監視しているので、すぐそのあとをつけてゆくと、お朝と重吉とは蔵のまえで出逢つた。暗い物影にかくれて、おかんはそつと窺つてみると、危うく消えかかる手燭を下に置いて、お朝はまず鼠捕り粉の半分ほどを一と息に飲んだ。そうして、ふるえる手先でその飲み残りの袋を男に渡そうとしたので、おかんはあわてて飛び出そうとする時、あたりは火のように明るい世界になつた。おかんは夢中で小膝をついて、両手で自分の耳を掩いながら、しつかりと目を閉じてしまつた。

毒薬をのんだお朝は雷にうたれた。これから毒薬を飲もうとした重吉は気をうしなつて倒れた。もとより偶然の出来事ではあるが、雷はあたかも心中の場所に落ちて来て、しよせん死ぬべき女を殺し、まさに死のうとする男を救つたのであつた。その驚きのなかにも、おかんは憎い二人の屍しかばねのうえに心中の浮名を立たせたくなかつた。彼女はそれすらも妬ねたましかつたので、そこらに落ちてゐる鼠捕り粉の袋を手早く隠してしまつた。それから家内の人々を呼んで、この恐ろしい出来事を報告した。

雷に撃たれた二人がこの時どうしてそこにいたかということが、まず問題とされなければならなかつたが、奥の便所へ通うには蔵の前を通らなければならぬように出来てゐるので、お朝がここ

に倒れていたのは便所へ行く途中であつたらしく思われた。重吉は蔵のなかへ何か取り出しに行つたのであらうと想像された。

憎い女が突然この世から消えてしまつて、男ばかりが生き残つたのは、おかんに取つてはこの上もない好都合であつた。かみなりは彼女に守護神ともいふべきであつた。しかし彼女はやはり不運を逃がれることは出来なかつた。お朝の死について起つたのは相続人の問題で、重吉がその候補者のうちで最も有力の一人であるらしいので、おかんは又もや氣を揉みはじめた。重吉が尾張屋の相続人となつてしまえば、おそらく奉公人の自分をこの店の嫁にしないであらう。かりに重吉が承知したとしても、世間の手前、喜左衛門が承知しないであらう。こう思うと、かれは又新しい苦

勞をしなければならなかつた。

そのうちに其の話はだんだん進行するらしい形跡がみえて、二七日の前日におかさんが松倉町の三河屋へ使にゆくと、そこでもそんな噂を聞かされたので、彼女はもう落ち着いていられなくなつた。寺まいりの当日、主人や重吉が今戸へ行つた留守に、おかんはいろいろに思案した。かれはどうとう思案をきめて、重吉の歸りを待つた。

重吉らが歸つてくる頃から又もや雷雨になつた。この出来事におびえて、家内の者どもが縮みあがつている隙をみて、おかんは重吉を蔵のまえに連れ込んだ。かれは男にむかつて、相続人のきまらないうちに自分と一緒に逃げてくれと迫つたが、重吉は肯きか

なかつた。そればかりでなく、自分はお朝の菩提のために一生ひとりみ独ひ身とりみでいるつもりであるから、おまえも思い切つてくれと云い出したので、おかんは狂氣のようになって、男の変心を責めた。そうして、もし自分のいうことを肯おどいてくれなければ、お朝が毒薬をのんだ秘密を主人に訴えると嚇おどしたが、男はやはり動かなかつた。訴えるならば訴えてよい。自分は心中の片相手として殺されてもいいと云つた。

「それほど死にたくば殺してやる」

おかんは赫かつとなつて男の喉をしめた。在所ざいしよ生まれで、ふだんから小こぢから力のある彼女が、半狂乱の力任せに絞めつけたので、辱か弱よわい男はそのままに息がとまってしまった。男がどうしても肯か

なければ、かれを殺して自分も身をなげて死ぬと、おかんはかねて覚悟していたのであるが、その場になると彼女は俄かに気がおくれがした。わが眼のまえに倒れている男の死骸をながめながら、彼女はぼんやり考えていると、雷の音は又ひとしきり凄まじくなつて、今夜もここから遠くないところに落ちたらしく、大地もゆるるように震動した。その一刹那にかれは何事をか思いついて、死んでゐる男の顔や手先を爪で引つかいた。

「おかんは死罪になりました」と、半七老人はわたしに話した。

「こんにち今日でしたら情状酌量にもなつたのでしようが、その時代ではどうもそう行きませんでした。それも自訴でもしたら格別、男

の顔を引つかいて雷獣の仕業らしく見せるなんていう狂言をこしらえて、自分は素知らぬ顔をしていたんですから、罪はいよいよ重くなつたわけです。問題の雷獣は、おかんの白状によると、最初の時にはほんとうに見たというのです。二度目の時にはそれから思いついて、重吉の顔や手さきを搔きむしつたのだといひます。勿論、善いことじゃありませんが、かんがえてみると可哀そうでおかんがいよいよ死罪と聞いたときには、私もなんだか忌いやな心持がしましたよ」

「可哀そうも可哀そうですが、女というものは恐ろしいもんですね」

「まったく恐ろしい。あなたなんぞは若いから気をおつけなさい。

いや、恐ろしいの何のと云つても、今のおかんという女なんぞは、そこに自然と憐れみも出ますけれど、なかには、まだ肩揚げもおりない癖に、ずいぶん生いけつ太ぶとい奴がありますからね。まあ、お聴きなさい、こんな奴もありますよ」

云いかけて老人は笑いながら私の顔を見た。

「あなたは甘酒はどうです」

「子供のときに飲んだきりですが……」と、わたしも笑った。

「あれは江戸の夏のもんですよ。固かたね練りのいいのを貰ったのがあります。息つきに一杯あつたためさせますから、あなたもお付き合いなさい」

「久し振りで御馳走になりましたよ」

三

あま酒で元氣をつけて、半七老人は団扇うちわの手を働かせながら又話し出した。

「あれはたしか文久三年とおぼえています。なんでも六月の末でした。新宿の新屋敷……と云つても、今の若い方々は御存知ないかも知れませんが、今日こんにちの千駄ヶ谷の一部を俗に新屋敷と唱えまして、新屋敷六軒町、黒くろくわちよう鍬町、仲町通りなどという町名がありました。いつの時代にか新しい屋敷町として開かれたので、新屋敷という名が出来たのでしよう。その辺には大名の下屋敷、

旗本屋敷、そのほかにも小さい御家人ごけにんの屋敷がたくさんありまして、そのあいだには町屋まちやもまじっていました。一方には田や畑が広くつづいていて、いかにも場末らしい寂しいところでした。

前にも申す通り、六月末の夕方、その仲町通りあきの空屋敷の塀外に人立ちがした。というのは、そこに不思議なものを見付けたからで、何十匹という蛇がからみ合つてとぐろをまいて、地面から小一尺もうず高く盛りあがっている。勿論、ここらで蛇や蛙をみるのは珍らしくないので、一匹や二匹のた蜿たくつているのならば、誰もそのままに見過ごしてしまうんですが、何分にもたくさんのたの蛇が一つにあつまつて、盛りあがるようにとぐろをまいているんですから、よほど変っています。そこで、通りがかりの人が始めは

一人立ち、ふたり立ち、又それを聞きつたえて近所の屋敷や町屋からもだんだん見物人が出て来たので、その蛇のまわりには忽ち二三十人も集まったんですが、ただそれを取りまいて見物しているばかり、どうする者もありませんでした。

『そのとぐろのなかには玉がある』

こんなことを云う者もありました。たくさんの蛇がうず高く盛りあがって大きい輪をつくっているのは蛇こしきとかいって、そのなかには、珍らしい玉がかくれていると、昔の人たちは云ったものです。で、今もそのとぐろを巻いているなかには、おそらく宝玉があるだろうという噂が立ったものですが、誰も思い切つてその蛇に手をつける者が無い。たくさんの蛇はちつとも動かない

で、眠ったように絡み合^{から}つているばかりですが、誰がみても気味のいいものじゃありません。武家屋敷の中^{ちゆうげん}間^まなどのうちには、生きた蛇を食うというような乱暴者もあるんですが、なにしろ斯^こうたくさんの蛇がうず高く盛りあがっては、さすがに気味を悪がつて唯ながめているばかり。そのうちに夏の日も暮れかかって、天竜寺の暮れ六ツがきこえる頃、そこへ一人の若い娘が来ました。

娘は十四五で、武家育ちであるらしいことは其の風俗ですぐに判ったんですが、大勢の人をかきわけて、その蛇のそばへ寄ったかと思うと、みんなの口から思わずあつという声が出た。それは無理ありません。その若い娘は単衣^{ひとえ}の右の袖をまくりあげて、

真つ白な細い手を蛇のとぐろのまん中へぐつと突つ込んだとお思
いなさい。まだ十四五の小娘ですから、手の先どころじやない、
二の腕のあたりまでするすると這入つて……。気の弱いものは見
ただけでも慄然^{ぞっ}として、眼を塞いでしまいたい位ですが、娘は平
気でその白い腕を蛇のとぐろのなかへ入れてしばらく探りまわし
ているようでしたが、やがて何か掴み出したので、息を殺して見
ていた人たちは又わやわやと騒ぎ出して、娘の手に持つているも
のを寄りあつまつて覗いてみると、それはひと束^{たば}の真つ黒な切髪
で、たしかに若い女の髪の毛に相違ないので、大勢は又あつと云
う。それを耳にもかけないような風で、娘はその切髪を持つたま
まで何処へか行つてしまいました。

大勢はそれに気を呑まれた形で、ただ黙つてその娘のうしろ姿をながめているばかりでした。いくら武家の娘だと云つて、まだ十四か十五の小娘が蛇のあつまっているなかへ腕を突つ込んで、平気でなにか掴み出して行く。その度胸のいいのにみんな舌を巻いて、一体あれはこの家の娘さんだろうと云つたが、誰も確かに知っているものがない。又あの切髪は誰のだろうと云つたが、それも判らない。みんなもその評ひょうじょう定じょうに気をとられている間に、たくさん蛇はどこへか消えてしまつたように影も形もみえなくなつたので、みんな又おどろいたが、もうその頃はそこらも薄暗くなつて来たので、よく判らない。多分そこらの溝へでも這入つてしまつたか、空屋敷あきの庭へでも這い込んだらうということにな

つて、見物人は次第に散ってしまつたのですが、なにしろ、それが蛇と小娘と切髪と、不思議な三題ぼなし噺が出来あがつているので、その晩のうちにその噂が新宿から青山の方まで一面にひろまつてしまいました。

『その娘は何者だろう。その娘とその切髪とどういふ因縁があるのだろう』

こうした噂が繰り返されて、それに又いろいろの想像説も加わつて、見て来たような作り話を吹ふいちよう聴する者もある。一体その空屋敷というのは、以前は内藤右之助という三百石取りの旗本が住んでいたのですが、二年ほど前から小石川の茗荷谷みょうがだにの方へ屋敷換えになつて、今では誰も住んでいないので、門のなかは荒れ

放題、玄関さきまで夏草が茫々と生いしげつているといふありさま。……昔は方々にこういう空屋敷があつて、化け物屋敷だなどと云われたものです。……その門前にあたかもこんな事件がしゅつ出たつたので、猶更なおよさらいろいろの風説が高くなつて、なにかその屋敷にも関係があるように云い触らすものが出て来たので、町奉行所の方も捨てて置かれなくなつて、一応その詮議をしようかと云つていると、ここに又一つの事件がしゅつ出たい来たんです。

その事件は次の日の夜のうちに起つたのでしよう。仲町通りのあき屋敷の門前、丁度かの蛇がとぐろをまいていたあたりに一人の娘が倒れているのを、あけがた暁方たになつて見つけ出したので、近所ではまた大騒ぎになりました。しかもその娘はおととい一昨日のゆう方、

そこで蛇のとぐろのなかへ手をつ突つ込んだ武家娘に相違ないというので、騒ぎはいよいよ大きくなりました。娘は刃物で左の胸と右の脇腹を突かれて、血まぶれになって死んでいる。それだけでも随分大騒ぎになりそうなところへ、おまけに例の一件が絡からんでいるんですから、みんな不思議がるのも無理はありません。

こうなると、いよいよ捨てては置かれなくなって、町奉行所でも探索をはじめることになりました。その役目を云い付かったのはわたくしで、善八という子分をつれて、すぐに新屋敷へ出かけました。大木戸外そとの事件ですけれど、事柄がすこし変っているのまぢかたで、特に町方まちかたから選み出されたようなわけで、わたくしも役目のほかに幾らかの面白味も手伝って、すぐにそこへ出張って行っ

て、まず近所の人たちに聞きあわせると、前に云った通りの始末で、娘は何者だか判らないで、まだ誰にも引き渡すことが出来な
いということでした」

あたまの上の風鈴が忙がしく鳴り出したので、半七老人は檐のきを
みあげた。

「おや、風が出ましたね。空の色も悪くなつて来た。又ゆうべの
出直しかも知れませんか。はは、大丈夫。この頃は滅多にゆうべ
のような雷は鳴りませんよ。なに、雷獣でも出て来たら、二人で
取っ捉つかまえて金儲けをしまさあ。はははははは。だが、まあ、こ
っちへ引つ越しましょう。だしぬけにざつと来るかも知れませ
んから」

わたしも手伝つて、座蒲団や煙草盆を畳の上に運び込んだ。

四

「これでいい」と、老人は又おちついて話し出した。

「わたくしは先ず辻番へ行つて、そこに引き取られている娘の死骸をみせて貰いました。それからだんだんと訊きいてみると、その蛇の一件の最中に、油断して紙入れや葎たばこい入れを掏すり取られた者もあるという。それで先ず大体の見当はつきましたが、蛇と切髪の方がまだよく判りません。蛇はともかくも、その切髪の理窟りくが呑み込めないのです、わたくしは不図ふとかんがえて、この近所で蛇捕

りを商売にしている者を探しました。蛇じやの道は蛇へびといふのはまったく此の事かも知れませぬ。はははは。子分の善八がそこらを駈けまわって、新宿の裏に住んでいる九助という蛇捕りを探し出しました。蛇まむしや蝮まむしを捕るのを商売にする男で、それを連れて来て詮議すると、九助はわけも無く白状しました。

九助は商売で、前に云った蛇の道は蛇の一件ですから、この空屋敷が草深くなつていて、この頃は蛇がたくさんに棲んでいることを知っていたんですが、たとい空家になつていても、ともかくも表門裏門を閉め切つてある武家屋敷へむやみに踏み込むわけにも行かないので、何とかして蛇を表へ釣り出す工夫くふうをかんがえて、ひと束の髪の毛をつかんでその屋敷へ出かけて行つたんです。嘘

かほんとうか知りませんが、女の髪の毛を焼くと其の油の臭いを嗅ぎつけて蛇が寄ってくるという伝説があるので、九助は堀の外で髪の毛を焼きはじめると、堀の中から大小の蛇がぞろぞろと出て来た。それはこっちの思う壺なんですが、なにしろたくさんの蛇が堀の下を、くぐったり、堀の上を登ったりして、果てしも無しにぞろぞろと繋がって出てくるので、さすがの九助もびっくりして、いくら商売でも気味が悪くなって来て、燃えさしの髪の毛をほうり出して一目散に逃げてしまったそうです。九助の話によると、そこら一面が蛇にうずめられて、往来が川のようになってしまうたといいますが、怖いと思う眼で見たんだから的^{あて}にはなりません。

そういうわけで、九助もあとの事は知らないんですが、往來の人たちが見つけた時には、それほど蛇もいなかったそうです。

それでもたくさん蛇がその髪毛を取りまいて、うず高くなるほどに盛りあがっていたのは、みんなも見たということですから、まあ間違いはないでしょう。そこで、その娘とそれを殺した奴との探索ですが、これはすぐに判りまして、二日ほど経つてから、

おもよとお大という二人の若い女を渋谷で引き挙げました。殺されたのはおとくという女で、おもよとお大がその下手人げしゆにんでした」

風はひとしきり吹き過ぎて、風鈴の音はまた鎮まった。老人は檐のきの方へ眼をやつて、「又あつくなる」と、独り言のように云つた。

「暑くなりそうですね」と、わたしも云った。

「ええ、降りそこなつてしまいましたから……。このあとはきつと蒸むします。かないません」

「そこで、その女たちは何者です。まったく武家の娘なんですか」

「なに、みんな小商人こあきんどや職人の娘で、おとくは十四五の小娘に

つくっていましたが、実はかぞえ年の十七で、あとの二人も同じ年頃でした。こいつらは今こんにち日という不良少女で、肩揚げのおり

ないうちに自分たちの親の家を飛び出して、同気相求むる三人が

一つ仲間になって、万引や巾着きんちやつき切りや板の間稼かせぎなどをやって

いたんですが、下町したまちの方でだんだんに人の眼について来たので、

このごろは武家の娘らしい姿に化けて、専ら山の手の方を荒しあ

るいていたんです。ところで、その当日、三人が連れ立って新屋敷を通りかかると、例の蛇の一件で大勢の人があつまっている。三人もそれを覗いているうちに、お大が小声でこんなことを云い出したそうです。

『どんな玉が這入っているか知らないが、あの蛇の中へ手をつ突つ込むことは出来まいね』

『なに、訳わけはないよ』と、おとくは平気で笑っていた。

『おまえさん、きつと出来るかえ』と、お大とおもよが念を押すと、おとくはきつと出来るかと強情を張ったので、いわば行きがかりの意地ずくで、もしお前がほんとうにあの蛇のなかへ手をつ突つ込んで見せたらば、おまえをあたし達の仲間の姐御あねごにすると二人

が云い出すと、おとくはすぐに出て行って、平気で蛇のとぐろのなかへ手を突っ込んで、例の切髪をつかみ出したので、なんにも知らない見物人は勿論、仲間の二人は流石さすがにびっくりしたんですが、人に覚さとられないようにみんな分かれ分かれにそこを立ち去ったので、誰も三人連れとは気がつかなかったんです。しかし見物人が蛇の方に気をとられている油断を見すまして、三人ながらそれぞれに巾着切りを働いていたというんですから、抜け目のないこと驚きます。

おとくは掴み出した切髪を途中の川へ捨ててしまつて、そこで自分の手を洗つて、さてそれから二人にむかつて、さあ約束通りにこれから自分を姐御にするかと云い出すと、おもよとお大いは忌や

だと云う。それでは約束が違うと云う。不良少女三人はさんざん口ぎたなく云い合いながら、その晩はまず無事に帰ったんですが、あくる日も又それで喧嘩をはじめて、おとくがそんならお前も蛇を掴んでみる、いくら口惜くやしがつてもあたしの真似は出来まいと云うと、こつちの二人も行きがかりで、何の、あたし達だつて掴んでみせると云う。なにしろお転婆てんぱ同士だから堪まりません。三人はその晩、また出直してあの空屋敷の門前へ忍んで来たんですが、きのうの蛇は勿論いる筈はないので、そんならこの屋敷の庭へ忍び込んで、見つけ次第に蛇をつかまえるということになって、三人はどこから這入ろうかと窺あいくちっているうちに、お大はおとくの隙をみて、隠して持っていたあいくちヒ首を不意にその乳の下へ突っ込

むと、いつの間にか云い合わせてあつたとみえて、おもよも一緒にヒ首をぬいて、これもおとくの脇腹へ突き立てたので、おとくはそのまま倒れてしまいました。その息の絶えたのを見とどけて、おもよとお大はそつと逃げ出したんですが、場末のさびしい屋敷町で、殊に夜ふけのことですから、誰もそれを知らなかったと見えます。

二人がおとくを殺したのは別に深い理窟もないんです。どう考えても蛇をつかむのはいやだ。といって、おとくを姐御として尊敬するのも口惜くやしい。唯それだけのことで相手を殺す気になつたので、年頃の女たちですけれども別に意趣遺恨は籠かこつていなくなつたようです。

こういうわけで、この事件は別にむずかしい探索というほどのことでもありませんでした。山の手の人たちは知らないでしょうけれども、わたくしは前からこのおとくという奴に目をつけていましたが、まだ年の行かない小娘だからと思つて、まあ大目おおめに見逃がして置いてやると、こんな飛んでもない騒さわぎを仕出来しでかしてしまつたんです。それですから、辻番でその死骸をみせられた時に、わたくしは一目でその身もとを覺つて、すぐにその同類を探させたので、訳なしに埒らちが明きました。三人の隠れ家は渋谷のおさん婆という女の家でした。この婆がまた悪い奴で、表向きは駄菓子屋をしていながら、この娘三人を引き摺り込んで、盗んで来た品物をほかへ捌さばいてやって、中途でうまい汁を吸っていることが

露顕したので、これも一緒に召し捕られました。一体ここらは昔から蛇なんぞの多いところでしたが、この一件以来、その空屋敷を蛇屋敷と云い出して、明治になるまで誰も住んでいなかったよ
うです」

老人の話が済んだ頃から、空はだんだんに薄明るくなって来たが、風は死んだように吹かなくなつた。風通しのいいのを自慢にしているこの六畳の座敷も息苦しいように蒸し暑くなつて、遠い空では時々雷の音も低くきこえたが、ここへは夕立を運んで来
そうにも見えなかつた。

「こいつあ降りません。ただ蒸すばかりですよ」と、老人は顔をしかめたが、やがて又笑い出した。「これじゃあ金儲けも出来ま

せんね」

成程これでは雷獣も飛び込んで来そうも無かった。

青空文庫情報

底本：「時代推理小説 半七捕物帳（三）」光文社文庫、光文社

1986（昭和61）年5月20日初版1刷発行

1997（平成9）年5月15日11刷発行

※旺文社文庫版を元に入力し、光文社文庫版に合わせて校正した。

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：網迫

校正：藤田禎宏

2000年8月22日公開

2004年3月1日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

半七捕物帳

雷獣と蛇

2020年 7月12日 初版

奥付

発行 青空文庫

著者 岡本綺堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>